

## 韓国語教育における新しい成績評価 : 教師と学習者が共に行う形成的評価

著者	金 泰虎
雑誌名	言語と文化
巻	10
ページ	189-202
発行年	2006-03-15
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00000436">http://doi.org/10.14990/00000436</a>

# 韓国語教育における新しい成績評価

## 教師と学習者が共に行う形成的評価

金 泰 虎

### はじめに

本稿は、教育活動の基本の一つである成績評価をめぐって、いかにすれば学習者の学習努力に相応しい評価を、的確、かつ厳密に行うことができるかという試みを、韓国語教育を通して明確にしていくことを目的とする。

教育活動においては科目や授業形態を問わず、学習到達目標と進度を設けて授業を行ってから、最終的に教師が主体となって総括的評価を行うのが一般的な傾向である<sup>(1)</sup>。

しかし、たとえ教師が工夫を凝らした教授法で授業を行っても、この総括的評価に対して学習者の不満があれば、その教育活動は総体的にいい教育を施したとは言い難い。そこで、野村和宏氏等<sup>(2)</sup>、教師を評価の主体としながらも学習・指導の過程において形成的評価を取り入れ、学期中、何回か学習者の中間成績を公表することで、学習者間に競争意識を芽生えさせ、授業を活気づけようとした。この試みは成績評価に関する研究が乏しい中、教師や学習者の授業に対するフィードバック（feedback）ひいては成績評価に対する学習者の不満の解消にも繋がる優れた研究と言えよう。

それでも依然、教育現場では成績評価に対する学習者からの不満の声をよく耳にする。これは裏を返せば、今の成績評価には学習者の不満を生じさせる要因が存在するということがある。総括的評価といい、形成的評価といい、あくまでも成績評価の主体は教師であって、学習者の自己評価が評価過程でほとんど反映されず、これが学習者の成績評価の不満に繋がっているものと思われる。

そこで本稿では、成績評価の主体である教師に学習者を加えて<sup>(3)</sup>、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価を実施し、その成績評価の結果と教師主体の総括的評価の結果に対する学習者の反応を比較分析する。

この教師と学習者が共に行う新しい形成的評価とは、教師が一方向的に成績評価を出すことでもなければ、学習者が一方向的に自分の成績評価をすることでもない毎回のプロセス（process）を重視する評価方法である。成績評価の過程に学習者が加わり、教師と学習者が各自の成績評価を出し合う。また、両者の評価にギャップ（gap）があり、成績等級の変更を生じさせる場合は、教師と学習者がその原因を確かめた上、最終的に教師が成績評価を出すというのが、その特徴である。

この試みは、学習者の努力に対する正確な成績評価はもとより、成績評価に対する学習者

からの信頼構築、ひいては毎回のフィードバックによって授業に対する学習者の学習意欲の向上も期待できよう。

## 第1章 新しい形成的評価の対象とその内容 – 学習者・科目及び学習到達目標、授業の進め方、そして授業内容 –

教師と学習者が共に行う新しい形成的評価の実施を可能にするため、ガイダンス (guidance) を通して、受講科目の特徴や学習到達目標を明確にし、いかに授業を進め、どんな内容を学習するのか明示する。

### (1) 学習者・科目及び学習到達目標

教師と学習者が共に行う新しい形成的評価は、K大学の学習者(新入生)を分析の対象とする。この学習者が受講する「基礎韓国語」は「会話中心」で「話す・聞く」技能に重点をおく通年科目である<sup>(4)</sup>。

「基礎韓国語」は「会話中心」の科目であるため、学習到達目標は「話す力」と「聞く力」が中心で、次の通りである。

- ・「話す力」: 韓国語の発音に関する諸原則が理解できる。簡単な韓国語の会話文になじんで初歩的な日常会話ができる。
- ・「聞く力」: 韓国語の会話に必要な「標準語」の音感習得ができる。

言語学習において4技能(話す・聞く・読む・書く)はいずれも欠かせないものであるが、K大学ではカリキュラム編成の上、これを二つの「話す・聞く」と「読む・書く」に分けて、学習到達目標を設定して教育を行う。

### (2) 授業の進め方

教師と学習者が共に行う新しい形成的評価を実施するため、1回目の授業でいかに授業を進めるのか、以下の表に基づいて詳細に説明を行う。

- a 教師と学習者が共に行う新しい形成的評価における「評価基準及び記入方法」(第2章を参照)

学習者には、「評価基準及び記入方法」・「学習者の自己成績評価表」・「学習者の自己成績評価表【記入例】」を配布する。これは、新しい形成的評価を行うために必要な教師と学習者が共有すべき事柄である。

- b 絆を強める授業

- ・名札の着用

授業における教師と学習者、学習者同士の絆を強め、なお学習者が積極的に授業に加わる環境づくりのため、教師をはじめとする全員が漢字とひら仮名、そして韓国

語で書いた（韓国語表記だけは、日本語の韓国語表記を学習する10回目から書き加える）名札をつける。この名札を活用して、教師は学習者の名前を呼び、ロールプレー（role play）の際は、会話のパターン（pattern）に名前を置き換えたりする。

・座席配置

前列から席を埋めて<sup>5)</sup>、ペア（pair）を組めるように座り、特に毎回異なる人と座るようにする。この座席の配置は学習者同士の絆を強め、容易にロールプレーの実施ができるようにするためである。

c. 双方向の授業（学習者が積極的に授業に加わる授業）

・毎回、新しいペアと自己紹介の練習

12回目の授業までは日本語で、韓国語の自己紹介を学習する13回目の授業からは韓国語で行う。その韓国語の自己紹介は、学習者にテキスト（text）の内容をベース（base）に、実際の生活に相応しい内容に変えて丸暗記させる。

・ロールプレー重視の授業

ペアを組んだ学習者同士で役割分担、または学習者と教師がペアを組んで、読み解いたりする。

・学習者の全員が参加する授業

学習者の一人一人に当てて読ませたり、質問して答えさせる。

このように学習者が積極的に授業に加わる授業、つまりロールプレーや学習者が担う役割を多く設定する<sup>6)</sup>。毎回の授業では、学習者全員に果たしてもらおう役割が公平になるようにし、一人も漏らすことのないように当てていく。

d. 緊張感を持たせる授業

・出欠を厳格にチェック（check）する。

・文法事項の学習の際は、ノート（note）筆記を求める。

・居眠り・雑談・携帯電話の電源切り忘れがないように注意する。

・テキスト、ノート、辞書、名札、筆記道具の忘れ物を確認する。

このように学習者が授業に集中できる環境をつくって授業を展開する。

e. モチベーション（motivation）を高める授業

授業の最後の3分間は、「学習者の自己成績評価表」を記入させて、学習者自身の成績を自分で管理させることで、授業に対する関心を高める。なお、学習者には韓国語と日本語は文法・語順・単語などが酷似していること<sup>7)</sup>、そして必ず出席して積極的に授業に参加し、課題を提出すれば、他の言語より簡単に語学力が身に付くということを強調する。

### (3) 授業内容

教師と学習者が共に行う新しい形成的評価は、どんな内容をもって授業を展開するのか。授業は、基本的に定期テストを含めて前期・後期それぞれ15回の授業を実施する。「基礎韓国語」のテキストは『書いて覚える朝鮮語(改訂版)』(白水社)を使い<sup>8)</sup>、文法や例文は補充しながら行う<sup>9)</sup>。この「基礎韓国語」は「話す」・「聞く」技能を中心とする科目であることから、ロールプレーを盛んに行うことができるので、学習者や教師が形成的評価を行うのに適していると思われる。

通年にわたって学習する内容は、以下の通りである。

#### (前期)

- 第1回 ガイダンス(授業目標・内容、「評価基準及び記入方法」)、ハングル文字
- 第2回 単純母音
- 第3回 子音(平音・鼻音・流音)
- 第4回 子音(激音)
- 第5回 子音(濃音)
- 第6回 複合母音
- 第7回 終声法則、連音化
- 第8回 口蓋音化、濃音化、激音化
- 第9回 鼻音化、流音化
- 第10回 日本語のハングル表記(名札に韓国語表記を追加)
- 第11回 日本語のハングル表記読み
- 第12回 辞書の引き方
- 第13回 저는 학생입니다.(私は学生です): 自己紹介、丁寧語(韓国語の自己紹介)
- 第14回 저는 학생이 아닙니다.(私は学生ではありません): 体言の否定
- 第15回 定期(中間)試験: ペーパーテスト、前期の「学習者の自己成績評価表」回収

#### (後期)

- 第1回 前期の復習
- 第2回 3학년 입니다.(三年生です): 漢数詞
- 第3回 뭐라고 합니까?(なんと言いますか): 授受動詞
- 第4回 지금 몇 시입니까?(今何時ですか): 固有数詞
- 第5回 어디 갑니까?(どこ行くのですか): 丁寧語(上称形)
- 第6回 역에서 집까지.(駅から家まで): 助詞
- 第7回 말씀 좀 문졌습니다.(ちょっとお尋ねします): 謙讓語
- 第8回 연세가 어떻게 되십니까?(お幾つでいらっしゃいますか): 尊敬語

- 第9回 좋아하지 않습니다. (好きではありません): 用言の否定
- 第10회 좋아해요? (好きですか): 丁寧語(略待)
- 第11회 어서 오세요. (いらっしやいませ): 尊敬語(略待)
- 第12회 언제 오셨어요? (いついらっしやいましたか): 過去形
- 第13회 또 하나의 지구. (もう一つの地球): 連体形(未来・現在)
- 第14회 또 하나의 지구. (もう一つの地球): 連体形(過去・回想・大過去) まとめ
- 第15회 定期(期末)試験: 口頭テスト、前・後期の「学習者の自己成績評価表」と合計、即座最終的成績の提示

このような内容に基づいて教師と学習者、学習者同士の絆を強めながら、双方向の授業、かつ学習者が積極的に参加する授業を展開する。

## 第2章 「評価基準及び記入方法」と教師の役割

前章で取り上げた学習到達目標やその内容に基づいて、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価を実施するため、教師と学習者が共有すべき「評価基準及び記入方法」や「学習者の自己成績評価表」を明示し、最終の成績評価をまとめる教師の役割について述べることにする。

### (1) 「評価基準及び記入方法」

教師と学習者が共に行う新しい形成的評価を可能にするためには、教師と学習者が共有すべき授業の進め方や内容、成績評価の基準、そして記入方法の熟知が必要である。したがって、以下の「評価基準や記入方法」を定めて、それに沿って行っていく。この「評価基準及び記入方法」、そして評価の目的については前期の1回目の授業におけるガイダンス(guidance)で説明を行う。この成績評価は定期試験だけではなく、出席・課題・ロールプレー(role play)・講義時の対応・小テスト(test)を総合的に評価するものである。評価項目や記入については、さらに以下の表で詳細に示す。

(表1)「評価基準及び記入方法」

<p>@評価基準（前期と後期は同じである）</p> <p>出席</p> <p>a. 8割以上の出席がないと評価の対象から外す。</p> <p>b. 欠席：授業開始から30分を経過してから入室するか、あるいは入室していない場合</p> <p>c. 遅刻：授業開始のベル（bell）がなってから30分までに入室した場合</p> <p>課題</p> <p>期限までに出さないと減点が伴う。</p> <p>ロールプレー（role play）</p> <p>挨拶や教科内容に関する学習者 vs 学習者、学習者 vs 教師</p> <p>授業時の対応</p> <p>a. 授業中の質問に対する対応</p> <p>b. 居眠りや雑談、携帯電話電源</p> <p>c. ノート（note）筆記</p> <p>d. 忘れ物（テキスト&lt;text&gt;、辞書、ノート、筆記具、名札）</p> <p>小テスト（test）</p> <p>a. 筆記：教師が採点したものを学習者に渡して確認させた後、「学習者の自己成績評価表」に書き写させる。</p> <p>b. 会話：ロールプレーによる会話テストの後、教師と学習者が各自の評価表に記す。</p> <p>定期テスト</p> <p>a. 筆記テスト（前期）：教師が採点した試験用紙を学習者に渡して確認させた後、「学習者の自己成績評価表」に書き写させる。</p> <p>b. 口頭試験（後期）：口頭試験の後、教師と学習者が各自の評価表に記す。</p>
<p>@記入方法（以下の様式をもって前期・後期ともに1枚を記入する）</p> <p>出席（15回）：合計満点は15点</p> <p>1回当たりの点数（1点 / 0.5点 / 0点）</p> <p>出席：1点、遅刻：0.5点、欠席：0点</p> <p>課題（10回）：合計満点は20点</p> <p>1回当たりの点数（2点 / 1点 / 0点）</p> <p>期間までの提出：2点、遅れての提出：1点、提出せず：0点</p> <p>ロールプレー（15回）：合計満点は15点</p> <p>1回当たりの点数（1点 / 0.5点 / 0点）</p> <p>上：1点、中：0.5点、行わなかった：0点</p> <p>授業時の対応（15回）：合計満点は15点</p> <p>1回当たりの点数（1点 / 0.5点 / 0点）</p> <p>対応した：1点、対応して居眠り・雑談・忘れ物・携帯電話の電源切り忘れ：0.5点、対応しなかった：0点</p> <p>小テスト（5回）：合計満点は15点</p> <p>1回当たりの点数（3点 / 2点 / 1点 / 0点）</p> <p>上：3点、中：2点、下：1点、受けなかった：0点</p> <p>定期テスト（1回）：合計満点は20点</p> <p>1回当たりの点数（20点～0点）</p> <p>テストで獲得した成績を記す</p>

\* 以上の評価基準及び記入方法に基づいて、毎回、「学習者の自己成績評価表」に記入する。但し、教師が対象項目を実施しなかった場合は「/」印、自然災害によって授業の実施ができなかった場合は、平常点で全項目を満点に記す。15回以上の授業が実施される場合、超過の分は記入しない。前・後期の合計素点を足した上、1/2をかけて最終の成績とする。





(表3)「学習者の自己成績評価表【記入例】」

科目 基礎韓国語 担当教師 日本 太郎 氏名 韓流 太郎  
 学部 文学部 学籍番号 12345 回生 1 回生

番号	項 目	日時 / 回数 / 素点													合計	
		4/4	4/11	4/18	4/25	5/2	5/9	5/16	5/23	5/30	6/6	6/13	6/20	6/27		7/4
	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回	12回	13回	14回	15回	/
	出席 (15回)	1	1	1	0.5	1	0	1	1	0.5	1	1	1	1	1	13
	課題 (10回)	/	/	2	2	/	0	2	2	2	2	2	2	/	/	18
	ロールプレー (15回)	1	1	1	1	1	0	1	1	1	0.5	1	1	1	1	13.5
	授業時の対応 (15回)	1	1	1	0.5	1	0	1	1	0.5	1	0.5	1	1	1	12.5
	小テスト (5回)		3	3				3			2		2			13
	定期テスト (1回)						/								18	18
																88

課題提出の要求なし

忘れ物

遅刻

欠席

提出せず

対応しなかった

居眠り

完全に丸暗記ができなかった (中)

学習者は、(表1)に基づいて<sup>10)</sup>、(表3)「学習者の自己成績評価表【記入例】」を参照しながら、(表2)「学習者の自己成績評価表」を記入する。

以上の評価内容は出席が重んじられていると言えよう。つまり、の出席やの授業時の対応は連動しており、欠席した場合は両項目とも得点ができない。初修外国語ではあるが、とりわけ韓国語と日本語は文法や単語、語順などが酷似しているため、欠かさず出席して学習すれば、他の言語より簡単に上達ができると見込んだことから、出席に重点をおく形をとったのである。

## (2) 教師の役割

教師の成績評価表も学習者と同じである。ところで、教師の重要な役割は教師の成績評価はもとより、計画通り授業を展開して「学習者の自己評価表」の記入ができるように進めることである。つまり、第1章の(2)・(3)節に基づいて授業を実施し、最終的に前・後期の素点を合わせて成績を出す役割を担う。

ところで、教師と学習者の評価にギャップ(gap)があるとき、最終的な評価の原則は次の三つである。一つ目、教師より学習者の採点が低いとき、学習者の採点を優先する。

二つ目、教師より学習者の採点が高く、学習者が成績評価に納得しない場合は相談を行って、教師と学習者との評価における相違点を糾明した上で、最終的な成績評価をする。

三つ目、教師と学習者の評価のギャップを調整する方法として、目に見えて確認できる項目、つまり出欠・授業時の対応(中でも居眠り、携帯電話の電源切り忘れ、忘れ物)・課題・筆記による小テスト、筆記による定期試験に対する点数は、教師の成績評価表を優先する。主観的な評価項目(ロールプレー、授業中の質問に対する対応、小テスト:会話、定期テスト:口頭試験)は、教師と学習者の間をとって採点する。

前期は、15回目の授業終了時、学習者から「学習者の自己成績評価表」を回収して教師の成績評価表と照合する。教師の合計素点と比べて、学習者の採点が高いとき、上の原則に基づいて、つまり「学習者の自己成績評価表」に具体的に朱入れの説明を加えて学習者に返す。教師の朱入れに納得できない学習者は、教師と確認し合う場を設ける。その際、教師は「学習者の自己成績評価表」の複写を備えて学習者との話に臨む。

後期は、15回目の口頭テストの後、その場で教師と学習者が成績評価を出し合って、前期と合計し、即座成績を提示する。合算した前・後期の合計素点に、さらに1/2をかけて100点に計算し直して、その素点をもってK大学の成績基準である100~80点「優」、79~70点「良」、69~60点「可」、60点以下「不可」に当てはめて、最終の成績としてまとめる。

ここで前・後期を問わず、学習者の評価が教師より高くても低くても、双方の成績評価を比べて5点以上の差が発生した場合は、学習者とその相違点を綿密に確認しあう。ことに、後期には学習者の成績評価がやや高くなるギャップがあっても、5点以下で成績の等級が変

わるようなことがなければ、学習者と確認し合う過程を省くことにする。但し、学習者の採点が教師より高く、1～2点で成績の等級が変わる場合、すなわち80(優)～79(良)、70(良)～69(可)、60(可)～59(不可)にひっかかれば、必ず採点の根拠を調べた上、学習者と確かめ合って成績評価をまとめる。

このように教師と学習者が共に行う新しい形成的評価においては、学習者自身の成績評価が反映され、また相違点があった場合、両方の評価を確認し合い学習者が納得した上で、成績評価としてまとめるという点が、教師主体の総括的評価と異なる点である。

### 第3章 「基礎韓国語 ・ 」の成績評価に対する学習者の反応

教師と学習者が共に行う新しい形成的評価の「基礎韓国語 」と、教師主体の総括的評価である「基礎韓国語 」に対する成績結果をめぐる学習者の反応を調べることにする。

#### (1) 「基礎韓国語 」・「基礎韓国語 」の成績評価に対する学習者

(Q1)は、K大学において「基礎韓国語 」(教師主体の総括的評価を採用した授業)を学習した学習者に対して行ったアンケート調査である。また(Q2)は、対象者は同じくK大学の同じ学習者で、「基礎韓国語 」(教師と学習者の新しい形成的評価を採用した授業)に対する反応である。調査対象となった学習者は76人で、彼らのこの二つの成績評価方法に対する反応を比較した。同じ学習者からの反応を調べるため、異なる必修科目の授業を比較の対象とした。

(Q1)「基礎韓国語 」を学習して得られた成績についてどう思いますか。括弧に を付けなさい。

自分の努力や達成度よりとても高く評価されたと思う。 ( )

自分の努力や達成度に比べて若干高く評価されたと思う。 ( )

自分の努力や達成度と合致するちょうどいい評価だと思う。 ( )

自分の努力や達成度に比べて若干低く評価されたと思う。 ( )

自分の努力や達成度よりとても低く評価されたと思う。 ( )

(表4)「基礎韓国語 」の成績に対する学習者の反応(教師主体の総括的評価)

項目					
回答人数	0人	2人	54人	14人	1人
比率(%)	0%	2.63%	71.05%	18.42%	1.32%

(Q2)「基礎韓国語」を学習して評価された成績についてどう思いますか。括弧に  
を付けなさい。

自分の努力や達成度よりとても高く評価されたと思う。 ( )

自分の努力や達成度に比べて若干高く評価されたと思う。 ( )

自分の努力や達成度と合致するちょうどいい評価だと思う。 ( )

自分の努力や達成度に比べて若干低く評価されたと思う。 ( )

自分の努力や達成度よりとても低く評価されたと思う。 ( )

(表5)「基礎韓国語」の成績に対する学習者の反応(新しい形成的評価)

項目					
回答人数	0人	0人	76人	0人	0人
比率(%)	0%	0%	100%	0%	0%

(Q3)教師主体の総括的評価(「基礎韓国語」)と比べて、教師と学習者が共に行う  
形成的評価(「基礎韓国語」)についてどう思いますか。括弧に を付けなさい。

とても良かったと思う。 ( )

良かったと思う。 ( )

普通だと思う。 ( )

悪かったと思う。 ( )

とても悪かったと思う。 ( )

(表6)「基礎韓国語」の成績評価方法に対する学習者の反応

項目					
回答人数	34人	41人	1人	0人	0人
比率(%)	44.74%	53.95%	1.32%	0%	0%

以上のアンケート調査は、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価(「基礎韓国語」)  
と、教師主体の総括的評価(「基礎韓国語」)に対する成績評価の結果に関して学習者の反  
応を調べたものである。

総括的評価の(Q1)においては、22.37%(17人)が学習者自身の努力と合致しない成  
績評価であったとの反応を示している。努力より低く評価されたとする19.73%(15人)の  
学習者には、教師の成績評価に対する不満に繋がることが予想される。

一方、学習者の成績評価に対する不満を解消するため行った、教師と学習者が共に行う新  
しい形成的評価の(Q2)は、すべての学習者が自身の努力と合致する成績評価であると  
答えている。なお、この二つの成績評価方法を比較した場合の反応も、ほぼ全員の学習者が

新しい形成的評価に好反応を示している。

## (2) 「基礎韓国語」学習者の分析

アンケート調査以外で、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価の過程における学習者の反応については、次のようにまとめることができる。

新しい形成的評価の実施によって、まずは学習者の授業に対する関心が高まり、授業に臨む姿勢が積極的になった。例えば、テキスト(text)を持参していない学習者は学習する予定のところまでをコピー(copy)し、持参して授業に入ってくる。また、辞書を忘れた学習者は他の学習者から借りてくるなど、自ら調達したり、名札を忘れてきた学習者は実際の名札と同じサイズ(size)の紙に名前を書いてつける臨機応変ぶりを見せる。さらには、課題の提出が遅れた学習者は教師の研究室にまで持参したりと、授業に対する熱意を見せた<sup>11)</sup>。

次に、途中脱落者が大幅に減ったことである。例年なら受講者の約15%強の途中脱落者がいたが、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価を実施してからは約10%(8人)の学習者に留まり、脱落者数は約5%(4人)と大きく減少している。

そして、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価における双方の最終的な採点に著しいギャップ(gap)はほとんどなく、教師と学習者の評価に5点以上の差が出るケースは、全くなかった。予想外に、約半数の52%(39人)の学習者は自身の素点が教師より1~2点程度低い傾向にあった。

ところで、約10%(7人)の学習者は教師よりやや高い採点をしている。そのギャップを生じさせる最大の理由は、出欠である。例えば、欠席ではなく、遅刻であるとか、または遅刻していないと主張する学習者が多い。言い換えれば、教師主体の総括的評価において出欠が一つの評価項目である場合、学習者の成績評価に対する不満を生じさせる一因になっていると言えるであろう。

以上、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価により、学習者の成績評価に対する不満が解消されるだけでなく、学習者が授業に対して高い関心をもつようになった。なお、学習者が積極的に参加する授業展開を模索する教師、及びその授業方針に対しても追い風になったと言える。

## 結びにかえて

韓国語教育における学習者の努力と学習成果に適合した厳密な成績評価を目指して、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価を行った。この新しい形成的評価を実施するためには、まず教師と学習者が授業の進め方・内容、そして「評価基準及び記入方法」について、事前に情報を共有する必要がある。もう一つ欠かせないのは、この評価ができるように、教

師が正確に授業を進めることである。この前提条件を満たしてこそ教師と学習者が共に行う新しい形成的評価は成り立つのである。

ところで、この新しい形成的評価と総括的評価の結果に対する学習者の反応を比較してみると、新しい形成的評価のほうが学習者自身の努力に合致する、納得できる成績を収めることができたという反応が顕著であった<sup>12)</sup>。

さらに、教師と学習者が共に行う新しい形成的評価が、成績評価に対する学習者の不満解消だけでなく、学習者に授業に対する積極性を持たせ、よって例年と比べて途中の脱落者も大幅に減るといった結果となった。

但し、新しい形成的評価をめぐる教師がこなさなくてはならない事柄が多く、従来より負担が増えるという側面もある。しかし、評価基準が明確なこともあって、成績評価に対する学習者からの信頼が得やすく、さらには毎回のフィードバック (feedback) によって、教師はもとより学習者にとっても授業計画が立てやすくなり、次回の授業で活かすことができるなど、積極的、かつ発展的な授業展開を繰り広げられると思う。

## 注

- (1) 『英語教育現代キーワード辞典』(増進堂、1991年) 247頁では、「成績評価の主体」によって 学習者による自己評価 学習者間の相互評価 教師による評価、「評価時期」によって 診断的評価(学習の前) 形成的評価(学習・指導の過程) 総括的評価(一定の期間後) そして「学習者個人と到達目標」との関係によって 相対評価 絶対評価と分類している。
- (2) 野村和宏、対馬輝昭、中川典子「大学の外国語教育における形成的学習評価とフィードバック」(『流通科学大学論集 人間・社会・自然編』第14巻第2号、流通科学大学学術研究会、2001年)
- (3) 本稿では、注(1)における評価主体による分類に当てはまらない、つまり教師と学習者が共に主体になるものである。
- (4) 一方、成績評価の結果の比較対象である「基礎韓国語」は、「読む・書く」技能を中心とする「読解中心」の科目である。K大学では、「基礎韓国語」と「基礎韓国語」を通年科目としてそれぞれに週1時間ずつ、合計週2時間、必修で受講することになっている。
- (5) 拙稿「『韓国語会話』授業をめぐる一つの試み」(『ポリグロシア (Polyglossia)』第4巻、立命館アジア太平洋大学言語教育センター、2001年)で示したように、「コ字型」の座席配置をもって授業を行うが、学習者が多いため、本稿の試みでは一般的な座席配置にした。
- (6) 前掲拙稿「『韓国語会話』授業をめぐる一つの試み」で示したように、学習者が積極的に授業に参加する進め方である。
- (7) 例えば、拙稿「日本語と語順や文法・単語などが酷似している上、東アジア地域でその必要性が増している韓国語を学んで見ませんか」(『Zephyr (ゼフィール・にしかぜ)』第28号、甲南大学国際言語文化センター、2004年)での、日本語と韓国語の酷似性に関する内容を紹介している。
- (8) 「読む」・「書く」技能中心の「基礎韓国語」は『ことばのかけ橋』(白帝社)をもって授業を行う。
- (9) 拙稿「日本における韓国語教育の諸問題」(『言語と文化』9号、甲南大学国際言語文化センター、2005年)で指摘しているような文法用語の相違なども紹介する。
- (10) 比較の「基礎韓国語」は、8割以上の出席を義務づけ、「定期試験の成績に講義中の態度、小テスト、

出席状況など平常点を加味し、総合的に評価する」との総括的評価である。

- (11) 前掲野村和宏、対馬輝昭、中川典子「大学の外国語教育における形成的学習評価とフィードバック」の21～22頁で指摘しているような内容と類似した学習者の熱意が確認できる。
- (12) 厳格な成績評価の実施については、すでに「教育方法等の改善」(『21世紀の大学像と今後の改革方策について 競争的環境の中で個性が輝く大学』大学審議会答申、1998年10月26日)においても求められている。